二四

胡蝶

胡蝶

12
4901
24

こて婦　（胡蝶）

月日はやくして、いつしか春の盛りとなる。

三月の二十日過ぎ時分に於ける春の山家の光景

第の弥陽寺は、不動堂の手前を辺へ入りて、かなたこなた僅かに残れる

紅つゝ面白い鶯の囀りを聞かせる。外の里の

春はもう晩春となり桜花の満開の頃の春はなびず

色いずに強つてゐるのかと、驚ろくべきであつた。

強に築山をかほる緑のあを中島の岩間に咲いて滴るやうな色をそえてゐる芸術がある。

背景をなして、紅白黄紫の花の香と竹をいろのと、遠くかすかにそして、心許なく思ふであらうと思雅の態度を傾れて、近ぶ小、頃

底見の船をは家造れ小屋、それに鳥居形暖簾などの紋章とちらきに加へさせられて無かろくの進水式を執行はれた。そのはには雅

華麗の美人とそして船中の音楽と催さやう

れる。

現王遠上達朝が四月に戻って来て、数多の葉書をもたらした。

彼女の中学は外ヶ丘にあり、さぶりの

ばで、その上は中学が去年の秋、書待つ間

はとい[illegible]象徴の作歌をたさつれこと[illegible]があり。

高くくも、高は野に春がゆみて、お庭の秋を見

るにもやうな紅葉があるすすきが、私が整

四の紅葉で一すぢうつくしく見て、私が庭の秋に

が春のなさいと頃んでよこされ、それに学の

上が為へ[illegible]と[illegible]かれ、のと、俳句が添あて掲ゆ

に野まう雲れは既四明の手為もあり、書の彩歌

の通信は

りまでお待ちなさいと言われたことがあった、
その広場をするはずこと思ふ、侯爵の大
臣も、どうもしてその発の事業において中宮の
広間に通れようと作ちやうれど、お相手は
外ならぬ中宮さま、弱るべき方なくて、恐縮に
出かけて来て来と言既知なすべきてないか
ら、まのは一つ、中宮様のお方達の物めです
ま、改ら い物めきの連中と毎に集めて、幸ひ秋
の内府の南の池に書の内府の東の池に通ず
やうに造つて、その境目に小山を築いて、二

つの古府の陽ての関的と見せてある、その山の
裾端から陽ぎ過ぎて、こちらの東の飯能に行
けさせるこ。では此方の若い女達
とともしよう。
そこに集めて置いた役を動のさせるやうな
ことで、その人々をお集め物遊ばせの
ようなみしい観音を云てた新
どうけいさと
観音を有土風の山に絡って、概を取り掠を
さす意都も当角度のみづちに張はせて、取から、
ふてい
腰帯から人物まで、色々考えめ合して、大きな地
の中に集り出した。
のであるから、時々ゆる外国に

ほんとうに美しいやうな心地がしてしみじみ和白
いと、中宮つきの女房などは廊下にて
居る。
中宮の入はの高陽に毎と美麗せて見る
と、皆人の一寸引き出した花の立ち姿、殊に桜の枝
も皆だらう絵に書いてやらでおつ。あつち
こつちに霞を帯びた枝々の花の蕾も、いかにも
錦を引き張りたやうに、中宮方の人々は毎の中
から、春の内裏の人々は北殿と陽てい遠かに見
やらるて、春の深くなるにつれて、春を待つて居た梅
枝をしだらしたる桜の花も、何となくなつかしい色彩

を見せてゐる。　中庭の方から来て、私の
内庭では、もうとっくに過ぎた桐も、此頃では今を盛りに
こゝ、庭の[illegible]の[illegible]の葉の花も、色濃く開き
つゝあるではないか。　さて、早に枝無れて池
の水に影を写した山吹が崖の岸よりほろ〳〵と
こぼれて水に浮かぶ風情など、蕾んだのが浮
して敷って水に浮かぶなどで、一ゝえも言はぬ風
趣である。　池には水鳥の群が蓄を解れず仲よ
さうに泳ぐ。　細い枝などを咬へて花
びらを[illegible]。は[illegible]に義
い並行の線を綴る

くがひ、鶯等

長

[illegible]ばかりに、花いかの形の絵を交へて[illegible]

[illegible]は、[illegible]絵模様[illegible]書き[illegible]つて[illegible]

きたい位で、[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]

の[illegible]ちるの[illegible]さうに思[illegible]、紅葉の一日を

暮らす[illegible]であつた。　秋の[illegible]の[illegible]の[illegible]が紅び

を[illegible]つた秋に

風吹けば[illegible]の花さて色[illegible]えてこやれ

[illegible]に[illegible]る山[illegible]のさき

春の[illegible]や井手の川[illegible]に通ふ[illegible]庄の

山吹[illegible]に[illegible]くり

竜の上のこもたづの船の中に見い
ぬ名をばこっに残さん
春の月のうらい四にそて行く船の棹
棹のしづくも花も散りけり
(月が吹いて来て、陰ーこつのが花のやうにえ
えしかもその花までが心吹きに見える。
すると、次郎が心
吹の名物として高に向こ
そこ心吹の岬(近江の国、石心と順多との間で
ないのか。 ‖ いつやく此の春の山頂の三月のれ
此が心吹の名物として一帯の名高い山頂の平場の平

の川端に立ってゐるのでせうか。

その記憶に

は、岸に山吹が咲いてゐるのうと思ふと、水底にも多くい山吹が咲き自つてゐるまうからね。

こゝの古屋の花山吹が山吹の岬のに者ゝ、多に幸

福の井戸の名所の風に流水の名花をうたはれ

く、達もうく、古屋の背に見られてゐるもの

多蓮華山とも称ねまゝまい。著作福とりよ男

は屋の時屋敷の命と帯び、不老不死の薬と和

めにも年へ出つて年わか、まら時に吉迦知か

つひ多女が多毋の中で見いてしまつたと伝へ

る。それとは反對に無邪氣な此の五しい爽快な船に乘りながら、考えいぬとて、月も高いあと也に殘りますやうよ。此のが長く長く長く長く不老不死の境なくてすむから好。

のはのを眺めるために、それのと俗がなかなか、船に棹さして行くと、岸の花、眼に映る花が多くなるい、半の雲の流れまでが、花が翳るとええますから。

と四方を眺めて、あちこちの長い車とそ、花の方。

が去り別れると言ってある。いかにも一通り伸びなだけで別に新奇とした所はないが

ないが、作者は此の四首の絵歌と、何の会理的の根拠もなくばいかに豚の生れらあに並べたのは

ないが、作者がかしつゝあるとは信ぜられないうも、作者の作品に於ては、その点に於いて前作の物語作者が達した程度に及ばなかったことがあるのである。

リもどり数ものはかるい事と、桃太郎の心もとゝ、名を忘るまゝと、悦惚として、行く末を帰る故にのつたやうに思ひ、中宮方の女達の心

を吸ひ取つて世の事をべてを忘れさせられ、それも無理なる如き美しい水の面の眺めである。その中に書の月も春かゝると、母の中に蓮（わうじゃう）廣章

とゝの事が記こつて、ひどく面白いので、それを半途に聞き止すのかと、家か来でなく思つてゐる中に、自分も釣船にさし一時やすみて坐て下りてしまつた。

えもと此の作品の設計が仰（ぼか）の寫真（ぶつ）の通りの編美の美を畫くこの事あるも、実名の故、割りすの鏡蓮の蓮と、簡単にもと考めたのか、吠舌氣が利いて人の口と

居ってみるところに、主人役の若い人達が、紙れぶくろと精一ぱい嵩に書くべき、その附箋と いに、宗教とをこきまぜて錦にも書らず 又陰好のち。中主方がそれらと一緒になれ（りつ、）

ると、著かに又弥れも同さ弥れ以外の珍しい事柔 をそ伝ふる人達が次きに責で出す（かう）のを聞くのである。

の来人達も特別に選ばれたちさうする名人等が 其が出る人々の心を感ずる（めらとのする）板の附りを書くべて

ばせられる。その中に初に入るのである。

かくて魂の責きめる中に祝の祝に入る。どうし

も能ある心地かするので、無意識に、幕次とと
もに、家格の石碑、北陽の作の芸の上に、学人と
呼て、兼ね書できも、と遠郎や、玉遠も、名に、陽
物の物を、ものして、おれ、おれ、得意の
ものは、律の、調と、吹きて、堂上には、必物
陽を、行ち、て、会奏する出、数の、調べ、仲
間の、行と、考べ、上の、糸と、調べ、はやく、絶
やに、考つ、、、それから、名に、物、て、おなたる
と、れ、ば、れ、る、行は、うれと、行つな、いわに、吸

代に生れ出でた平安朝があると、その感情に系列した人々は論ずく、芸術や美術の美しさも、古の歌に陶冶せられて、新しく出来た歌の写生も、みな平安朝の間さに支配されて、和歌の月も、美しいと、所謂好い格調で詠じてゐた。

たゞ三の句と、いと、面白い物か言と、いと、春の霞べ、や、月も、やはり、紅葉秋の夕ぐれ、時の美的感情が、あらゆる、多くの集うた人々が、すべての辞へられたことであらう。

それから花と鶯とを、歌ひ、時代に収める、過ぎ去り、律黄金

の春雨集をかきまれに考せられて、烏剃仰の宮
が青柳を折るとく面白くお話ひなされた。
あるこの古宮も仰言されるが、やがて行く所
絶れる。
何かうかる者の句、その山鳥の鳴く
を、中言は物を語さい、者にはかられるのが来れ
よ、ちれつたいと、どうく面白されたんであ
つた。

この蜂の上の飾せられる句は、しいて面白
き者の意義をかる点を軍めてるつ点伝る筆
が内角では絶つれれ、上こうなる句を作る

然、家人達の心を慰めるのまだ多いのを、殊に
近頃の流行のあると持ち歩く人々もあるが、
最近の新流行の髪が来られて、その中分る
きれいさ、古屋が特別に変わりついて居
られる様子だが、貴く世間に聞こえて来た
イヒ、陽明に表れず、心を寄せる人が多いことで
あらう。それについては、明治元年の
資格ちと思い場かいて居られる多陸の人こ
そ、俗らを求めて特別な事振と見せ、或は言葉に
現れへ変を求められ、まさ其の中には年

やはり年ごろの関係で、お明り得ない胸の中の秘
密の思ひに満ち満ちたる若の方達でもあるこ
とであらう。

また若の中には、異腹の父母（すまだい）と
いふ実際の事情を知らずに母心（すきごころ）を寄せてゐ
らるる内方（部屋）の方達でもあられるらし
い。

強に隠れしてゐられる淑氏の方達の
事実長部屋の室で、此の人は長く連れ添はれ
た此の方を取られて、此の三年ばかりの方男
やもめの私しい暮らしを続けてゐられるの
で、公私と寄り集りて自己推薦の運命を辿ぶる

のであつた。今朝は祖母の心遣にすつかり酔
つぱらやうな振をして、夏の花とかさ[illegible]て、くり
りしやきりと生に婚礼[illegible]をえせつゝ、踊
いでゐられる程なが、まことに[illegible]で[illegible]。大
臣もてれえよう思ふつぼとて心[illegible]
ゐるが、俺らて知らず頼とゐるうち。
富の席に、ゐどくゝ心を強まされたれ物語で、手
伝をとゝ抜ぬつゝ、

[illegible]に一ツ物、なるる意心が手[illegible]とうにお
[illegible]て此ぐて行くとうでするよ。あつ

らいたなら、
と、笑を
怒とあけてはゆきまわる。

蓮のゆめにこしのたかばふちに身
なれんあやは情けさ

(兵)敬に、蓮の一本ゆめに武蔵野の花はみなあち
東ゆと思えるとある。思かゆめのゆめ、あ
のみしい姿の前に、心かゆ一知い、青いたけにるあ
てゆるのです。その蓮の色ともつた藤の間に
身と投げて居ると云る後、夢に情いとはる
ひとりゆん。(兵)敬に、私が名とたのむ
て、と言つて

去野に居つゝ花にかゝゞしとそこゝろせめ
とある。我が家の妻とたのしむ女と同居まれる
足弱だ、さゝわたしの妻人の家徒の花をかかゞ
しなさいと言ひつゝ、妻の花に係へて妻を敢げ
ゐた。

大臣は上機嫌になにこゝおだゝして

あちに月と接げつゝ、やとこの考は

花のあちらとこちらで見よ

（こゝは妻はまた妻がなくい。

その間に、その妻の花

に、その妻に、月と接げつゝ

の値打があるかど

うか。

でも此の考は花のあたりとえちちらす

に、ふと、涙ぐんでいらっしゃいました。

まあ、ほんとに御親切なさいまして、御親切なさいまして、と言って、涙をいっぱいためなさるので、えちがわかれてかえりたくもなることもさることながら、それかもう一倍、かあちゃんが、遠つかりて今朝のかえったのこと、ほんとうにこのことの

中宮が催しの春の花見と後

今日は四月にあたる。

後の日のお客の中に、

きっとのもうたがいにて、佐良良の部屋を取

り、祝の膳をはのこの客にかへる人も多

かつた。陰りがあつておぼされた方もあつた。

正午付合に出て中宮の前の内侍に会釈された。

かく大臣の君を始めとして皆内裏に居いて居られ

ます。殿上人達も倍張り合ひました。

その中に葉室の内侍が成彩にきまして、その孫子

かやうに光られ、信さうされて、長れた事

いお偉いとはるられたのであつた。

そして仲忠に花を取がうれた。その歌彩の内侍

何と、第一番女の人と思ると嘆きの様子に驚く

し分りられて、男の人、特の人、貴族達と特別に

に出させて、馬方は鞭の先端に掴まり、
を打ちも、蝶の行方を眺の
どちらも同じく旅客の長い足車のを選んで、
世の中にこんな新しい政治の家と見せた
あらうかとも思はれるものであつた。その者女
群と驚ぶた船は、南の海路の前の葦山の麓から
陽炎出でて、陽炎の中を過ぎて、中宮のお屋敷に
出ることで、丁度舟の進路と変つて、特別さつと風
が吹いて来て、船の掛が少し動いて、船頭の掛の
動くかの様子見せう。空はうらうらと晴

れ後つて、ゆのきうが霞人である。その霞の間か
ら、新鮮動音に持ちれ[illegible]ある。[illegible]
等の現れたのは実に面白い。[illegible]
ものであつた。

[illegible]人の日暮ひ因るさきとして
別に平洗の[illegible]とが終りにならず、[illegible]
の左右に連つた廊と[illegible]屋に見えて、そこに似
ぬ別[illegible]の脇掛とと[illegible]を[illegible]備へられた。
やがて八人の[illegible]女等が、夜[illegible]の陽下にえち[illegible]つ
て、花ぐもと敬立する。

[illegible]弧りの掛りの人が
[illegible]いて、花[illegible]の由[illegible]
[illegible]に移つ[illegible]。

の山情景は古歌の山ふみの文章の中情をか便と
て差上げられた。

花園のこてふとさへやたちに新まち
ぬうとくるるらむ

春の里明のたち花の揚と
山吹と春ふ糸、花はもとより、保物なら花園の胡
蝶、まてふの意味をも家やも此の意女の象人に
物をもたん胡蝶までと、夢の下、夢やふの土中に新
と約つ杉生りも磯ふあべさ男は、親しめ物、色
さしい、義ましいものに見えすことでせうね。

中宮は、はゝあちきの紅葉に寄する心を段だんと、にこ〳〵しても笑になる。

なりもてなすにて

また中宮殿の御意遂もこれはすつかりおやられたすうた、かうと知つたら、ほんとうにもんなと言つて、書にけちとが所にするべきなかつたと、中の巻の。が結的に、すつかり我慢の角とあつて嘆くあつた。

やがて劇烈の感ある事の動が起こる。

外では雪の降りかゝる音に紛れて幽霊頻伽の雪が絶やかに連俳と聞きつけられて、あ

つちぐもこつちうえ
ばりつづける。その間に
彫るが、彼は、絵に、
収めの部分の製作に近づ
く時分の面白さはたまらぬものであった。蟬は
面白のこと、此の集は宇多院のお化に作られた
ものとうなずけるが、本当は、自然
に出たものとの別れ。ちがへつ、笹かまの
山吹の咲きそめ、れた絵の陰に隠れの集ひ出
でる、面白さはなかい。中宮義子と結ばれて、
絵、るべき所上人等が、頼と自信ありて意味等にか
ゞ
ゞ
ゞ

る。

御使は中将に向かひ、いかにも相応しく、強の取合なれて準備しておいた白き袋の一張や梅花わくまで、手ぬぐひ、手拭に鶴をつけた。お使に立つた文翁の中将は、美しの御花を携へて女の姫君とかたらうわた。中将に託された中宮の歌人は、「我が君の御のほうの梅の花のごとくに、うつくしきものかな」と歌ひ、君が寿の内容と言ひ、

こてふは、誘はれなすに心あるとは

童やうなきをへだてざるなり

新角まてふとりみるを捕つる胡蝶をお使に下

さつたが、わたしは真夏の蝶に後れて一緒

に上りたかつたでーた。

山吹は隣の心のないことを示し

紫の花は晴れ

紫は紫に八重の

紫と結び、春を表すもの。

たちらん。中宮のお側にはかうよりに年功

を積んだ才媛ばかりのなかつたのであらうか。

その中を敢てとも申し兼ねる

やうに見られる。

ぶらぶらと、ついうつかり
くうこれ見られる。
ぶんや中産方の女房達に
は強く強調されるべきは
ずかあつたが、かわうの
ものとなるからあくこ
とに努める。

その後月日の経つにつれて、このやうな商売の
隠微な情緒ずゝ、高みまるに
陽の当る所を通れば
自然の成り行きとして
ものべ弱くなれる。
快い気持して、お側に仕へる女達も
つて
しまつて
ものを言ふ
のが
嫌
で、
お
訪ひ

方面警察の職務は、いつもの踏歌の形に伝
説面があつたらしい。春の夜の上げ潮と
共に流れるやうにすつた。私も上げ潮と一緒
の伝説面があつたらしい。
（他の芸道の場合の場合の場合の場合の場合）
かは、よく知られてゐるが、そこにかくれた
事情がある。人間の命がけの事情がある。
ぶ線にすれすれの心は、えがえがの心理
ゆすりの心理がもつれもつれの心理の上、花粉
見がるいでのも当心と変なて現に、みなれた
ので、まつたくまたゝまとも変と知れつ人も可

なり多くあり。

されども彼は、これをぬいかれ

滅に思ひ空むべきことなれども

広自分の広心に物足くの為時まで

つがけられさうに世界かい心持が

て来るりを感ぜられたのでも

つぞその内ち自ら、そのあ

人にならうかなどと知らせて、自分も

にならうとの為に広心の傾く

もあらう。

殺の中時間義務別かく

のもとにまち考って許されること

もにあるこ

ても

り、如何にも自分自身に満足して、

事情を知ら

女者は抜うわるく思はれるけれども、同国の人
は、かも知らべき
もの二人の血縁関係と思ひ込んでゐる
ので、中将は主張する独立者と信じてゐて、
相愛関係までは知りもしなかつた。
それとも、ふく乃姫に実の兄弟なる内侍殿の
は、夕霧の男に好きそれ、第子になまめめい
手紙とひらのつゝ、顔みられぬとてがうか
うして居るのを、女房はその関係を別けて
白と別けた立場とも為り為れなのを心苦
しく思ひ、寝の夜に続られたいものであると、

自分のからくてゐるうちと

心のなかに感じては
それに対するにすぎないけれども、古屋に
新しきものとして
うるおいを与へるものだ。
向
うの物の新しみつゝ、
それと、寒に向ふらしく、
ふ。
何とかいはれたいけれども
りかもしれない。いかゝやは
にはーかどの大象が
いさであらう。
そのキに卯月に入って
て淡色の衣象が人の
曲線美と象徴の
て美々

る時に、ふと、空の林檎
ますが、不思議に何とな
く面白くなって来るが、大体は仏の眼にかゝ
る要もなきを感ずる心地として、当世教義といふ
くゝ内部的に時日くゝと過ごしたちが、その
中に初夏の陽象に復されてか異様から野の花
方（五月）に送ってくる文が日に〳〵暖くなることよ
とか、それ見たことか！
それ見たことか！
好みも面白いと心惹かれて、お気向き冷淡一
すゝへとかゝ動にるつてきた心地にる、その年

の為るべき相手にはなれなくなるやうにお勧め遊ばされる。

その義理のお父の意義指南に対する、さうくばうんに言ふことも出来ず、ただ黙してひどく心に苦しいことに思われた。その中に弟の長郎郎の言が、言ひ方のつて来て、まだ幼稚もないのに、もう苦くしく口を信ぜと一緒に行きたがる迷ひ書き遊べる一

ほぼ俗

私が兄弟の兄王達が那多たうわゝ中に、こ

れ代文の辞とも吹にるつて得意気にお笑ひなすつた。

みに

ほぼ俗

のみるとなく印いい時分から心に陽て附く。

特別に変ってあったが、何事をも打明けて
た中に、唯だ女の意義の筋だけは、どうぞ隠
して、そして、芸術家肌がいや
年になって、年頃の男達の間にもその通の道上
根と云うが、面白くもあり、嬉しくも思
はれますよ。やはり恋愛は
よ。男しぶる人の方のあるのが、あの意味に
別に文の時芸とは違ってもうやうな人
うとは思はれないんだわ。それから本当に
譜はやっぱり鼓動の方が特
別にひどく真面目で特

陽さっての方面の事ばかりの事
てきまして

と、装が女の身に入りさうに後てかゝはるやうなれど、移りわるけに用いてゐうれるだけであつたのもまたあらたな侍従の感覚の

右大将ひどく真面目で物々しい故なるべくあるが、世に倦る「恋の心」なれるもつまづくの磯へで、あの移るべきなかゝ、見に参して此の通し無訴意敬してゐるものも、これまた人生の一面で面白いですね。

と言ふ、特徴ある表現しみのあるに、一つ沙らしく風の線の体の太字説

そして傍く手を拡きしめたのと、犬歯個くちびるを強んだのがある。

「わたしどうして強んだのだらう」と言って、引きあげて片隅に寄ると、犬歯はいなくなって、

思ふとも見ないなくなり出

もう水は色し見えわたる

わたしは泳いでゆくとうとうあるかからまで

泳ぐ

泳ぐとうとうあるかからまで

泳ぐとうとうあるかからまで

泳ぐとうとうあるかからまで

りになるまいな。

傷少わくる水に色のをきめ
く、我がいらいも色かえ
かりも新鮮で、しかも西
書いてある。

ほんとうに
偉れのた？

とかまわなさうけれど、
らない。（妻の兄弟と知
恋愛の歌をとって来しすで
ものを代とつけた作者

47

ずに、その髪も兄弟
の感、妻の感
さから、わざと切
ものを、その修

の技巧である。

そこで医は友達として、蛸壺の動揺に関する心情を示されたが、その心情が、絶望的に、絶叫的に、悲鳴的に、絶望に基する動揺のやうにうつる。

[illegible]

討ちのがさうとさしかくとは、ひどいちやな

いか。

のに、高信と言せる人などがあつたらば、よく人達りと信じて、逃るべき人

[illegible]

ニ

つれなわるさをかさやゆすがよい。

男が意

[illegible]

ましい、まだ都ちの風の不都合な真

何を仕出かすかしれぬ。

一つは女の

生やうにもよる事で、必ずしも男の癖とは
ありは限らぬことである。
強から推して思つて
て返ると言ふ事は
いと思ふ。
知らずのわかる
ふ。
ふ。
ふ。

逸の傳を考へる時、すぐに分らはず、

わざと思はせぶりに書いて居るやうな

ふうの方が、却つて男の心を惹き思案の

後に残こす。又男の心を

惹かれたとする他の

一の男からの傳の

ほうに近つひぬい所謂手紙に書いて

すぐ持ち込むやうに及ぶ。

ので、これは却つて男に傳られ来ると

つまり後者と惹く牧とを

比べる。

ある。

総にせは有る程目に近意すべき

で、前後の見地もなく、不注意に、載

人時の解つちやすな敬所を、男女

間の記録みるどと、又多ごすもの

は、絶もなくて、恋愛の絶対の

ばるもので、深く性を考えるまでである

かしかるがらの場合については、完

とつたち時といたの意、大事と一的意味

になるので、意義の乱れ伝ちと仕

出ぶきるいきわけもなく、それ女の

方からいろんと、宮ちゃん侍ほから受を高せらがな。
ちゃんと、ちゃんとりょうのも、男角の
絶叫を聞かせぬやうなので、表のあるべきやう
ではありますまい。此の二人の絶叫は別
として、その頃手強いはたの人に対するは、表の
性格のめりやす深さ傳きにちつて、人情をば
みなけれ云ふとちさるが。よい。さるはその
外に、何ちゃんかの絶叫されたる事柄の長さ云や
しさをも長くそかやりの。三十枚の
ちきい。
ちどと活を言ってれと、明るい拍うわるげに
あちう

を向いて入らつしやゝ、その接続は実に美しかつた。

両際（みぎは）に接する細長にて多くの手節の卵の形崩れのまゝ経、そのこつがいもよく動きあつて来せ[illegible]に多が行いてゐる。今までは巻動（そくどう）のこゝ[illegible]ものゝまゞ固会異性の接ける印象があつて、その都度に[illegible]（ほのぼの）ますものゝ[illegible]（ほのぼの）れたのであつたが、六條[illegible]（しらかたち）をつて方格に眠られ[illegible]（ほのぼの）

陰に美て、[illegible]の品欲（しなたち）と足巻（そくけん）[illegible]

中に、線々点々かゝるかゝ[illegible]化粧[illegible]

ども其の人にて陰意深く改められるので、

一点の不足もなく、花や

かに美しくなられた。明治に入りの新人と他人の

ものとを例すことを、ひどく悲しいように思ふ

ものである。

古人も偉かから之等つて、

なると偉かから之等つて、

と申上げるほのぼの若さ

い。

もしろ

こんな時代とてお揚げ迎げず方がし

つくられないすであるとつてゐた。

28ニ

愛の泪

いい之作品やるなどを、人格の出る

ものを取次は家にいたもの。以前から[illegible]知でさに[illegible]愛になってゐる三位人のお方からのはが返して同がわるく思はせ申すものいかがと思ひます…そのまゝ文ちはは変はしてゐるうしいやうすれども返すりどは実にもちゆきいてもいらしやるのでいつまでと申しやる。

愛情
がはぐくんだように
のは詩のだ。
いやちゃ細やかに
ある
書いて
ふく
稚
ある物語
と言ったっけ、にこ〳〵して
居るすると
なんだ、主人
はいよわと、体の
が納
ふる
のが、
遠く遠いて帰った
のでは
いやう。
内
た侯爵の中隠物が
に書いたように
こちらへ
来ると、
笑から
は、見知らにるって
ます
て、
吹
に
な
つたのでは
ゆ
見
ゆ
弟は
目を
くれて
相手になる。
笑が
笑かったので
は
いや

う。

と申しつけること、

実は

おゝ、それは言いこと だな。 あれから

また地下の方箱で あるが、あの兄弟達

をば、どうしてさうはいかない 目に会はせ

られるものか。 三位以上の公卿達でも、此

の人達の噂話に 邪魔 及ばぬ人が 洋

山あらうからなの そのうちにのみ達の中

で、中將は独りで 苦ちついた人物だ。そ

の中には自然実の兄弟と思ひ合はす様

何もあらうが、さう掲げると、現はさずに、
きら「紙るべく言ひかねて」やと言葉を紡らてゐあらうは
ないか。どうして、それは中なかのゐか文書き
ぢよ。

ちと、早速はれにもわかずに入てゐられる。

原氏は主髪に言れる。

原氏自身わたくしがかう何やあやをえち入つてゐ世
法ぶると、それについて見も心の中に、拍ら
るさい、自分はかうもしたくは思よと思れ
ることもあらうと、心苦しくまが咎めて、つ

いはをつぐまつとうまれもするが、しか
し世間のちからとどの位に知られますとりまするな、
まだ此の道うる信ずくして世間に通ぜぬ
出身で中は長く部屋のへ一人徒弟や足弟達の中に
埋れるとりまするな、どうであらう
と心配されますよ。これはやはり世
間で並に先輩の勇ましく後にこれらを
しくるうて後にいこそ、之に名乗りをで
て新聞でもれる事出あらうと思ふのであり
かれについて場所柄をえ淡すと、先づ

長部俊の言は、此のあと暫くして、
一人身で云うのであるが、人柄がいとく他つぱい色男で、外には
通ずる約束者あると、評判があり、
まだ内緒で、夜約つへ呼ぶ人などと聞き
にくいなと思つたお仙女もあるから、
ことよ評判があり。で、さうして、
来に来ず、何等かいうと見直す雅号の
あるお方とは、別に風流も起こさず、平穏に終わる
中に伝あて行けばよいが、あーても
駄目か

あるやうだは動り合ひの結果こたくし
て、男に愛されるやうな強さが、自然出てく
れるものと知れたいから、よく実に明かうとな
らば、陰あるの内心づかひがあるべきかと
思ひます。

次ぎに、昔は永年連れ添う
た夫を持つ方がもどく年寄られ過ぎたのに家
事が新しい時代で、おたくの新芸事をおめ
ると、その内々の事情があつて、それも お断
まる人

今にこたくが起こりやすいと
その焼石合ひ陰地の結果になつて、ちりな

す。

こゝかもさもあるべき事で、事実それは

しま見の堺見立めについては、さまざまに見り燃んで空めあれてあるのです。一純かうりゝ方和の事は、現ちどに身るも、思ふ通るとさつぱり出と言ひもしにくいことそれまでもありますが、しかまそこ二十二年、さうして私もかるべき年ゝ伺うにより

ずいぶん一つに分別の中身ぬ事もありますす

まい。

わたしと昔の人の命にて、そくるつんお母様と別てきません。唯だ祝とな言

つまり、俗世間のさまざまな
物の世界のものが、心苦しくなる
のが、心苦しいので、……
ものだと、大変親切に言はれるわけで、心苦しくなる
て、何とかして返すべきものだと思ふ。しかし
のもかう、さうした場合に、くよくよと考へられるばかり
ばかりでなく、それに対する
まだ知りつかぬ幼い時分から、親切とは
違ふものと、駒ぶつて来たので、さう
いふ事を言へば、実に思ひ辞へる
ことが出来ない人の

と言ふ事を知るが、いかにも結局に大人しいので、いかにもと思はれて、

世間の常識に、後の説より後の説をみでは

の説を言ふのを、とも云ふべきであるが、その後の説だと思つて、わたしの此の一通りの感想を、と、解説として、変入れはしないでせうか。

そもそも、加賀に霧ぬてお話するきるの

心に思ひて入らじやる方のるは、父子として

は親の為くなる事なので、おそらくはおもかわ

明らかになることが出来ぬ。

古書を自分なりに研究する時、明らかなる事実を発見することもあるのであるが、それは私のにしてそれ自分の所説に陥られるので、ちょうど私が

ちょうど、其の所説の如く、それに就いて、それに就く根拠の様のそれ、

如何なる場合にも其の所説に対するものは自分の所説のように新しいものとなるばかりでなく、其のみならず、偽の

根深く拠って分析するの

かのおんなに生れたわかるべき

「我が家の後の和枝の中に、しつかり抱きつくんだ

自分のるお、つひには別れく、て、各々別々の生活を、泣くることになるのであらうか。彼女が達

に我々に別れ、我が家と新しい夫と暮らすことに

なるのであらうか。」

「お母さんに相つて言て居た

に代人に手渡られるあと思へば、つく〳〵娘の

い こと である」と、母の前の蔵と引きあげて

て 涙ぐみながら、部屋に帰すもすぐ、間と

66

今度にはあらんとか若干わかはは

はめん根をなたづかん

「さう今になつて、彼の考へに此の分のるが何時
彼知らず生れ出でたか、いつものか誰と此の親
から生れ出でたか、などとそつて、若干なの生れ姿
の根本性などをもあるまうで、実必個べるとを
我々から。」「言葉に知られたところで、却つ
つまらない物見たをする為なでせう此のしと言
はれるのと、大体の意味を思はれた。如は考偏
心の中にさう思はれなかつたに相違ない、実

はぐんぐん進んでいき、新聞紙上に書かれることであろうと、姓名を新聞に紹介しく思われたれば、此の大臣の心持がめつたにない程に心細くなつて、とうとう、とうとう、死生みの覚悟をつけて、新聞紙上に書かれるまいと、書の物語りを世間に知らせるように、世態人情の実際を見知つて、本当の道を進んでゆくようにならねばならぬ

と嬉めて、抱たすら保氏を慕まれる。

保氏は之れを見て、更にの事ゆく、いやらしいと思はれる。

後つて、修行上にも此の事をすめる。

保氏は何どうも不思議に人を惹きつけるところがある子ですよ。

例のたくなつた点も愛はが、

とをしく捨つ同為さて、ぱつと変かる

的のない如でしちが、あの姉は心の持るが

解らやうに、人情つこい親しめる心ざまが、

かなりてゐて、人にも為めと偽せさやぬや

うに見えます。

なぜと言つてお褒めなさる。

上はもう一段うに思つて居れるのでない心解を又授いて居れるので、はゝあもう再たなと思ひつかれて、

堂司もまあ、せる人情が、

上の方は、奥様もなく打明けて、あなたとらいすは、お兄の

たよう親切にしやうつて入らつしやるのだ。

やうらしいすは、お兄の

妻でまあね。

と作しやるとの

ほゝゑむ

どうして、わたしに兄もなくないとうちなどがあるのですか。

と作しやる。

さあ、わたしにしても、この[illegible]に、[illegible]、随分たきがなくつういろいろーとおかあるようだよ。

まく[illegible]どいと

と一切いたいの心持の[illegible]出すから[illegible]

いわりるもんもんん。どうですかね。

と、徐ろに笑みながら信仰されると、これは鎖いでと考かれて

保氏曰

さうまで考るのは強硬ですよ。

然しも

[illegible]心があるなら、もう私心のあるを

髪が、ぬれてもあつまりやすいよ。

とうって、焼いのでは、話を切られたが、古心の中では、自分の上が、髪の間とあの推意さ、ふるのもれに理解されないが、それは、それにつけても、その意がどうなるであらうか、どうすべきであらうかと、他の推意にたいして、心を焼きつつ、同対に私れたから風変な申意に焼すると同つちものと、つくづく良ぐぜくれた。

それから、古心に熱かるすれに、暗い面の影へ行つてもも髪に絡まれた。

その中に、面かさ

つと陽の光りのたゞしんみりして坐る男の
身丈である。ちぢれ髪の若い顔が柏木そっくりの青
々と整ひかゝった新緑の青色が、何となく身体よ
ささうに見えると、心身と等りしつゝ、時吹に
なつて、白髪の多に混る天気和風とあつのを
抱きながら、和しくまた清しく明媚なるて、
見づめの姿のちの、新保に仍た若い女の
の一祭部ーさうな色ちやかさと強張くつゝ、仍の
めくこのようとお祭ねはなれた。那美子丁
丈手羽をとそして、打ちくつろいでゐられるが、

大臣を又、長おまひと面でしてそ、遍り死がまれらお
絵の色、何ともこなれずまい。このかと有
いろいろかち持るめすぐに夕絵の芽を思い出さす
にたくさるもの、陰らくるって、心の色を陰し有れば、
ほんの迷ひなものの石の折にも、何るにしても
かうまでは思ひましたが、此頃は思孫
にもう面白の人かと思ひちかへること
時々あります。高き係かさ仕ると
こんなの中将（又蓬）なども、芽
の面の面影などにちつともに似てゐないの

で、それは例へて、るもとさうは仏に仏

なりものと思つておちのた、うんに仏た

人もあるとは考へられよ。

と言ひつゝ考を傳へ傳へ人々たち

ゆく。

俗らそれも、彼の墓に入れた骨の

中に橋の夢想があつ、それを三年ぢかう、

橋のかをし彼によそるかがれ

る子ともちも保をある

「古今の歌人は月を好ちて橋の香をかぐ

と考へのかの家の和の香が漂がすると傳へ傳人で有る

V

が、格が、式の神の香りが格人の式のにそっくり
だと共に思うと、香りのそなうず、裏みまでが、また
式の身までが、そっくりで、変なつたものと
は思われません。
「が、まんのすは、未だゆあ
ることが出来ず、それと思うと、何もるすも
なく二十年のそういう間と思ごしてまたのに、か
うしてその娘がちんそっくりなのを見る
のは、等ではないかと思うと、ひっぱり見ぶけは
見ないまいでなるいか。
強くしく信仰なたを

と言って、手を広げ、ぐるぐると、女はまだ気は
たこの高い所あるの後に、ぐるぐる廻りて歌を
今年紙と思はれたが、じっと物へ、御の
方様に手を伸ばしたまゝにしてゐるのを。

神の手を
ふるわゞに梅のみさへ
はかなくもそこまれ。

神の手が
ぶらぶらと動くそつくりだと作しやるからに
は、手の
すらず、梅の裏まで、彩の見まで、が、母の
最後の
やうに、思ひかけぬ所ではかなく消えう

↑ してはたらなよ。

やうにたゝまれうと。三月まあるあなが
ゐるいと思
て、俤低い　たゞ　指ゐ、とゝも情かしげに、手つきのを
こーくと。体も肥つて居られる指と、貧形体紙
きの美しく優やかなのそこの美しく肥つ
たゝ、うゝがかう美しかりずは物思ひいもるを
きさと、美しさの話に生申物思ひのかなり
心地がして、話ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ長中と係られたのであつた。女は胸のゐを
から見ひどうしてよいかと戸惑ひして、指部を
自わなかゝる指ゐ、なつきうと解られど

▽たゝ

と、

どうしてさう理屈ばつて考へられるのです。……わたしのは、極く極く秘密にして、人に見せるのに、あの文を殺うて来る宮や大

又、繋がれぬ終局に美しい会はうとするのですよ。……事知らぬ思ひして、お互に思ひますよ。……わたしは今まで思ひも寄らぬことでさうかう、わたしの変情は世界中のやうなところへ、変に深切なる志がかけることで

時々ふと上に立つて考へるとよりも考かないでもあ

りませんか。

……わたくし信深い情のある人

るはとても有り得ないわけですから、更の

身を他人に任せやるのが、不安でならないもの

です。

と、情の表面の様子、信ぜられずに信しやるのであ

った。

其が出過ぎた嘆きえる記へとなれば

であろう。

その中に雨かやんで、陽が仄に照く空が彩雲

の奪と消のやうに同時に、それもまたさ寂でて

月影が命ゆい行のまもを現じて、ちちうがしん

みりと駆まり返つて来た時分に殿のこまかな物法が始まつたの様子が遠くから聞えて来る。あたりに響いて来る。殿は始終黙つてゐられる仲ではあるが、しかしかうしよいおとものつれにならいので、今まで黙んでゐた高中を打明けられた事の様へ切れ一筋ぐらいから、つい駒乗の駒に駆られたのであらう、上に僧侶なれば独言の点でもそれ、耳をたゝめやうに腰をすべかして、自分も女の側に近寄ると、義ころびなすつたすつたの位、女はすつかり考さ

わて、侍女達の親等くも知かて、此のうがいか
に人の好奇心を動かして、時に上らうちと、わさ
い心を動められる。これがも裏の段のが側に
に成るのならば、なに酷暑に接て弱
が取扱ひなさうも、かうよ方のまさか
義に紀に迫られるとよがめもつらいるが
るものかと、たまらなく悲しいので、体へずうと
はかれもなかつい俗ろ〳〵と雲ホ〳〵て、いか
に義に扱るものので、
俗物
さう思はれるとと思ふと、つらいですわ。
す

つまりは新しい人に新しいものでも、誰かが世間の道徳とするものを、男がおもわぬ時に言ひ出すやうなものに、そして此の頃永年考へた問題として世法を捨てる時、それかへて、それ程真心をかたむけて居るのに、それを入れようとしないとの考は、さらに悪い。唯だ体へられぬ心の

のです。

然と、試みに訪へて見て、自ら解ける時なり

と言つては高れり150く高れ
りもあく法されう。（たゞさへ怪かしたまうかそべりるが
らくつろいで法てて、嶮どもう著の方類
と見向つてるるやうなべ況かて、何ともな
れぬ高めさであう。しかし法は、だめに
かうりつまを言ひ出すのは、俗れるから法気過
ぎちると、くく高く出つ、そわに人に修生
ハうもうと思はれたので、あまり行の更は
ぬ中に法出かれに多うた。

法は法はさう跡まるとつくり思ひまはうで。

その人は、私のやうに、ほんとうに有頂天になるものです。わたくしの喜は限りもなく、涙も知らぬ歓喜であります。人に問ひ答めらるる世の苦に上ることはありません。

すきいの。これからも昔の夕敬が見た生きれて惜らるるくつたみの苦のにはかるい事も申しまいう。

（何大いたことなさい！）

君も同様なかないい心で過ごすることをして欲さい。

とた情なくしく信しやるやうな、明るい気がなくて、我れるかもしれないと思ふ心地が

て実に[illegible]られるので、

わたくしは[illegible]ほど惜まれようとは、実の所心

と思つてゐたのですが、それは又出来入

りにせのよくお惜みなさるものと思

える。

あゝ「弱つたあなたとお話きなさつて、

[illegible]この事ゆめ〳〵お結意にも……

と言つて帰りなすつた。女房も出来さ

もう過ぎて居るものの、世の中をまだ一向

知らないかるく、のみまうす、世間知らず人の物をも

さへ、なにも又も消きもされたことがないので、
俗氏はこれを「俗ちなる心ゆゑ」と考へ
言はれるが、これ程迄きさま、弱みくしい
況しいさまとは、どんなものか、多に見た事こ
とも生まず、始めて外の一事に見れて、こんな意
外の世界もあるのかと、驚かれ、くらるに
つれ、ひどく動揺をもすぐれぬので、お伽の人々
かかるから大方が悪さうだ、えらと言って騒
きもした。
扨、明治が好ましかから聞いて居
うかと、

長沢氏

敵味方の区別なく、誰いふへ
手のとゞくやうで、なほ多い位ですわね。
見えぬ
敵の祝ひ方は中々
かやうさ
から十分で、ちつとも
うけはしませんが、
なほ
なほ
なほ

と些しまれるのであつた

聖くる利は早速に反がある。明治は義が
まだすくれぬと云つて陳んでゐられると
も、女達かは祝ひと持つて来て、さアは返すと
早くと云つて使ふので、義が進まぬ様にと断り
かれるの程い後の外親はよりも野者らしくな
く手帯で真面目くさつた大層な仮に書い
てあるの

（手紙）

えら情知らずが居つのかと思はれるは
物るには勿論ますね。心優い法絶対妨

今も恋れ慕く、恨みしく思ひます。

七月

かどうゐまちがね。

うちとけてわをゐぬものを若草の

弟あうがたに、すぼはるらん

(二)ゆうてまだ寝ないうちに、どうして、まだ若い草の、ちがこ娘として、草の根の俤ら

めく、いかにも若草の事実のあつちやうに、俤さきちつがつてゐることであらう。」「まだ

ゆめ女であつたんでしたね。」と恋なれた事を言ふから、いかにも歌ふつたやうな詞と使は

れらの人々と、いちばんちがうから、嬉しいと、
思ったりして、私達はもうしたくないと思ったりするが、
しかし、それが、僕の考えどうり、
へつ、私達は、海義氣のないぶくれたい一隅奥
多に、俗人の一人
拝見いたしました。
只あれは、自分がすぐれ
ものだ、私達を中心にしたものだ。
と、私に言いてあるので、あの女、一体、何の
に、似合わず、この通りはさすがに、強直な一
本氣のところがあるとともに、こくして、すぐに、孤

くやうでは強がなるないが、これで恨み可愛がるのを、一種わがままさで通したものの心でもある。

この通り一旦意中を打明け、様の角使で出て来て後は、もう物の数人は意にもかけぬ大母のまるのかたかな意に出でる如意のいつそ打明けて

はまし孫又で遠慮いつまでもうちかゝるとうつちが、男はかたのかたのとうとうとう

親しみの感じ
を与へつゝあるのだ。
けれども、二人の子の真の情
と知つて居る。
しかし、
強く、強く、強く、
やうな心地がする。
たやうな心地がする。
たやうな心地がする。
やうな他思ひ
の他の
の他の
の他の

相手をいかに上手に
動かされるかを考へる。
さうまゝに、かう、當時のこと、われ
くとも淡々しい程
知つて居いて又
うかと思ふのと持ち
の人に心とおさ約
とは淡泡の代物な
に彼へ関かれて、
例の為もる物まの
ふこと、又ある
関係のある物は
約束は

性格を女でも思はれるまであらう約
束とかとも思はれ
ないと、あまりに知つて不安
が一方宮やち修な
るかの方等と強制されぬわい
ますく私に言い為うれる。
修す、ちが許されたと
まわるの
まだ関いて、先妻
さて、女

君と語りて樽を傾けて
明月を見の閑話と出り
あるくらしえだ

明治三十五年二月二十二日書始
〃 廿八日書了
所要の数 七百間

6. 28